

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：33939

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10219

研究課題名(和文) 道徳的感受性尺度看護学生版ver.3の開発

研究課題名(英文) Development of the Japanese Moral Sensitivity Questionnaire version 3 for nursing students

研究代表者

滝沢 美世志 (Takizawa, Miyoshi)

名古屋学芸大学・看護学部・講師

研究者番号：20736269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、道徳的感受性尺度看護学生版ver.2を改訂して道徳的感受性尺度看護学生版ver.3(以後第3版)を開発することであった。そのために、第1段階の調査として、道徳的な問題を含むビニエットを作成して、それを用いた看護学生を対象としたFGIを実施し質問項目を作成すること、第2段階の調査として、作成した質問項目を用いた質問紙調査を実施して得られたデータから探索的因子分析等により信頼性妥当性の検討を行った。その結果、看護学生の道徳的感受性を的確に測定可能な3因子(道徳的強さ、道徳的な気づき、道徳的責任感)構造の信頼性妥当性の十分に支持された第3版を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護学生が道徳的な問題の存在を見過ごすことなく気づき、問題を整理して、倫理的意思決定、および意思決定に基づく質の高い看護実践ができるようになるためには、道徳的感受性が必要であり、道徳的感受性を向上する教育が不可欠である。

今回開発した看護学生に使用可能な信頼性、妥当性の支持された道徳的感受性尺度看護学生版ver.3を用いることにより、看護学生の道徳的感受性の客観的な測定が可能となる。また、看護学生の道徳的感受性の程度が明らかになることにより個々の学生に応じた指導が可能となるだけでなく看護倫理教育の効果を評価することが可能となり、効果的な教育に向けた教育内容、方法の改善につながるという。

研究成果の概要(英文)：This study developed the Moral Sensitivity Questionnaire for Nursing Students Version 3 (3rd Edition) by revising the Moral Sensitivity Questionnaire for Nursing Students Version 2. Accordingly, in the first stage of the survey, we created vignettes involving moral issues, and used them to conduct a focus group interview for nursing students and develop questionnaire items. In the second stage, we conducted a questionnaire survey using the questionnaire items developed and assessed the reliability and validity using exploratory factor analysis with the collected data. Accordingly, we were able to develop the 3rd Edition with adequate reliability and validity of the three-factor structure (Moral Strength, Sense of Moral Burden, and Moral Responsibility) that can accurately measure the moral sensitivity of nursing students.

研究分野：看護倫理

キーワード：道徳的感受性 看護学生 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

2003年に日本看護協会から出された看護者の倫理綱領の中で、専門職としての知識・技術だけでなく、高い倫理性を身につけるために自らの行動を律するための規律が謳われている。また、2007年4月に厚生労働省より出された「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」、2008年の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」には看護基礎教育での知識や技術の習得に加えて、倫理観や責任感、豊かな人間性および人権を尊重する意識の育成、人間性のベースになる倫理性、人に寄り添う姿勢の強化を含む内容が示されている。石井(2012)が看護は倫理そのものであることを示しているように、倫理は看護の諸活動でますます中心的な役割を果たしてきている。

サラ T.フライ(2004)は、専門職としての質の高い看護を実践するには、倫理的決断を行う能力が不可欠であり、倫理的決断に至るまでの過程において道徳的感受性の必要性について示している。また、Sibelら(2015)は、道徳的理由付けと道徳的意思決定をするために、看護学生にとって道徳的感受性が重要であり、そのための看護教育は、看護の専門職業人になることや、患者ケアの質の向上にとって重要であることを示している。さらに、看護学生の道徳的感受性を評価することは、倫理教育の有効性を測定するのに有用であり、また看護教育を評価し、向上することにつながることを示している。このように、看護学生が道徳的な問題の存在を見過ごすことなく気づき、問題を整理して、道徳的意思決定、および意思決定に基づく質の高い看護実践ができるようになるためには、道徳的感受性を向上する教育が不可欠であり、必要に応じて道徳的感受性の程度を定量的に評価することが求められる。それにより、看護倫理教育の効果を評価することが可能となり、教育内容、方法の改善につながると考える。

先行研究において、道徳的感受性を測定する尺度としては、Lütznéらにより開発された35項目からなるMoral Sensitivity Test (MST)がある(Lütznéら,1994)。また、このMSTを改訂したMoral Sensitivity Questionnaire (MSQ)(Lütznéら,1995)、さらに改訂を重ねて開発した9項目の尺度revised Moral Sensitivity Questionnaire (r-MSQ)がある(Lütznéら,2006)。日本においては前田ら(2012)がLütznéらのr-MSQを使用してその日本語版として開発した改訂道徳的感受性質問紙日本語版(J-MSQ)がある。ただし、J-MSQは看護師向けの尺度であり、回答にはある程度の臨床経験が必要であり、この尺度をそのまま学生に適用できないことが私たちの先行研究において明らかとなった(滝沢ら,2015)。この研究を通じて、看護学生に使用可能な道徳的感受性尺度としてJ-MSQをもとにした、9項目の看護学生版第1版(以下第1版)を開発したが、道徳的感受性を構成する3因子を正しく捉えることはできなかった。そのために、先行研究(H27-29年度基盤研究C、代表：滝沢美世志；課題番号15K11488)により改訂を行い、ここに初めて道徳的感受性の3因子構造を的確に捉えることができる道徳的感受性尺度看護学生版ver.2(以下第2版)を開発した。この第2版は、道徳的感受性の3因子をきちんと捉えることができるので、実用レベルに達したと考えるが、内容妥当性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を確保できた一方で、内的整合性については満足な結果が得られず、我が国における看護学生の道徳的感受性を評価するための標準ツールとしてより広く活用されるためには、さらなる信頼性の向上が必要だと考えた。本研究において尺度を構成する質問文を抜本的に見直し、尺度開発の基本的な手続きに基づく道徳的感受性尺度看護学生版ver.3(以下第3版)を開発することを目的とする。

2. 研究の目的

先行研究において開発した第1版、それを改訂した第2版について、尺度を構成する質問文を抜本的に見直し、尺度開発の基本的な手続きに基づく第3版を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、①看護学生を対象とした道徳的感受性を構成する3つの要素（道徳的強さ、道徳的な気づき、道徳的責任感）を端的に表現した道徳的に問題のある3つの場面を含むビニエットを作成して、②ビニエットを用いたフォーカスグループインタビュー（FGI）を実施し、③その結果に基づき第3版 draft1 を作成した。次に、④作成した第3版 draft1 を用いた内容（表面）妥当性の検討のために1回目のFGIに参加した看護学生を対象として再度FGIを実施して第3版 draft2 を作成した。また、看護倫理教育と研究に豊富な経験を有する専門家パネラー10名により、Lynn（1986）の内容妥当性の定量化の方法に基づいて4段階のリッカートスケールにより Content Validity Index（CVI）を確認して、第3版第3版 draft3 を作成した。④第3版 draft3 を用いて看護学生を対象とした自記式質問紙調査を実施して、尺度としての妥当性、信頼性を検討した。

4. 研究成果

4-1. 第3版の開発

(1) 質問紙の準備

道徳的感受性を構成する3つの要素（道徳的強さ、道徳的な気づき、道徳的責任感）を反映した道徳的な問題を含む3つの場面のビニエットを作成した。そのビニエットを用いて、内容妥当性の確認のための2回のFGI、およびLynn（1986）の内容妥当性の定量化の方法に基づいて質問紙を検討して作成した。なお、本研究は名古屋学芸大学倫理審査委員会による承認（承認番号：447）を受けて十分な配慮のもとで実施した。

① 1回目のFGIによる質問項目の作成

・対象者

便宜的に抽出した愛知県内の1校の看護専門学校1～3年生それぞれ9名、10名、10名の合計29名を対象とした。

・調査方法および内容

2020年9月～11月に調査を行った。FGIのグループは、学年ごとの編成とし、1グループ4～5名編成の2グループ（1年生；4名1グループ・5名1グループ、2年生；5名2グループ、3年生5名2グループ）の看護学生を対象とした。インタビュー時間は、最短で1年生の39分、最長3年生の77分であった。インタビューは、プライバシーの保てる部屋で60分程度の実施であった。また、インタビュー内容は同意のもと、ICレコーダーに録音するとともに、研究者が適宜要点を記録した。調査内容としては、ビニエットの3つの場面それぞれにどのような道徳的な問題があるかを尋ね、併せて看護学生としてどうすべきかを尋ねた。その結果、学生が発言した意見の数は、「道徳的強さ」を示す場面で177、それらから抽出したキーワードは6であり、「道徳的な気づき」については96の意見、キーワードは5、「道徳的責任感」についての意見は55、キーワードは5であった。これら道徳的感受性に関わるキーワードを基に24項目からなる第3版 draft1 の質問文を作成した。

この第3版 draft1 を用いて内容（表面）妥当性を検討するために、FGIに参加した看護学生を対象として、2回目のFGIを実施した。

② 2回目のFGIによる内容（表面）妥当性確認

・対象者

1回目のFGIに参加協力した学生を対象とした。

・調査方法及び内容

2021年1月～3月に調査を行った。1回目のFGIと同様に、学年ごとの編成とした。参加者は、1年生は5名の1グループに留まり、2年生は4名編成の2グループ、3年生は5名編成の2グループであった。イン

タビューは、1 回目の FGI と同様にプライバシーの保てる部屋で実施した。また、インタビュー内容は同意のもと、IC レコーダーに録音するとともに、研究者が適宜要点を記録した。調査内容としては、質問文の意味内容が理解できるか、FGI で発言した意見が質問文として表現されているかを尋ねた。FGI で参加者から得られた主な意見として、質問文の文中で頻出した表現である「学生としての私」、「学生としての弱い立場」に対して、「学生であることは明白である。」、「学生は立場が弱いのか」であった。これらの意見に基づいて文章表現を修正、削除して 22 項目の第 3 版 draft2 を作成した。

この 22 項目の第 3 版 draft2 を用いて、Lynn (1986) の内容妥当性の定量化の方法に基づいて内容妥当性を検討した。

③ 専門家パネラーによる内容妥当性の検討

・対象者

看護倫理教育と研究に豊富な経験を有する専門家 10 名とした。

・方法

22 項目の第 3 版 draft2 を用いて、Lynn (1986) の内容妥当性の定量化の方法に基づいて 4 段階のリッカートスケールにより Content Validity Index (CVI) を算出した。その結果、22 項目中 21 項目について Item-CVI 0.8~1.0 であった。Item-CVI が 0.78 に満たなかった 1 項目を削除した 21 項目の Scale-CVI は 0.96 であった。これらの結果から、21 項目の第 3 版 draft3 を作成した。

(2) 自記式質問紙調査（郵送法もしくはオンライン）による尺度の信頼性・妥当性の検討

第 3 版 draft3 を用いて自記式質問紙調査を行った。なお、本研究は名古屋学芸大学倫理審査委員会による承認（承認番号：687）を受けて十分な配慮のもとで実施した。

(3) 対象者

対象は、中部地方の看護大学 29 校、看護専門学校 40 校に調査協力を依頼したうち、調査協力の得られた看護大学 5 校、看護専門学校 8 校に在籍する看護学生合計 1338 名である。そのうち、457 名（白紙回答 4 名を含む）から回答を得た（回収率 34.2%、有効回答率 99.1%）。白紙回答を除いた 453 名の内訳の詳細は、看護大学生 250 名（55.2%）、看護専門学校生 203 名（44.8%）であった。回答者の性別については、看護大学生、看護専門学校生ともに、大多数は女性でそれぞれ 232 名（92.8%）、181 名（89.2%）であり、対照的に男性はそれぞれ 17 名（6.8%）、22 名（10.8%）であった。学年について、看護大学生の 1 年生が 49 名（19.6%）、2 年生は 93 名（37.2%）、3 年生は 64 名（25.6%）、4 年生が 44 名（17.6%）であり、看護専門学校生の 1 年生は 41 名（20.2%）、2 年生は 111 名（54.7%）、3 年生は 51 名（25.1%）であった。

(4) 調査方法および内容

調査は、2023 年 11 月から 2024 年 2 月に、調査協力学校の希望に合わせて郵送法による質問紙調査もしくはオンラインアンケート調査により実施した。調査内容は、i 対象者の属性（教育種別、学年、性別など）、ii 第 3 版 draft3、iii 基準関連妥当性のための森ら (2002) の大学生のレジリエンス測定尺度により構成した。この尺度は、1「まったくあてはまらない」～5「よくあてはまる」の 5 段階リッカートスケールで評価する 36 項目からなる尺度である。この尺度は、道徳的感受性を構成する 3 つの概念のうち、「道徳的強さ」の概念と同様の概念を示しているため外的基準として使用した。

(5) 統計解析

統計学的分析には、IBM SPSS Statistics Ver.29.0 for Windows、および IBM SPSS Amos Ver.29.0 を用いた。尺度としての妥当性の検討のために、探索的因子分析の後、確証的因子分析によるモデル適合度の確認を行った。信頼性の検討のために、探索的因子分析により抽出された尺度全体、および各因子の信頼性係数

Cronbach's α 係数を算出した。基準関連妥当性については、大学生のレジリエンス測定尺度を外的基準とした「道徳的強さ」因子との相関の確認をした。

(6) 妥当性の検討

① 探索的因子分析

項目分析によりデータの正規性と I-T 相関を確認し、22 項目のうち 3 項目を探索的因子分析の実施前に除外した。探索的因子分析は、最尤法（プロマックス回転）により行い、固有値 1 以上を基準とした。また、因子負荷量が 0.40 以上、かつ 2 重負荷のない項目を採用した。その結果、「道徳的強さ」：3 項目、「道徳的な気づき」：5 項目、「道徳的責任感」：3 項目の 11 項目 3 因子が抽出された。

② 外的基準との相関

基準関連妥当性を確認するために、大学生のレジリエンス測定尺度の合計スコアと「道徳的強さ」因子の合計スコアについて Pearson の積率相関係数を算出し、基準関連妥当性を確認した。その結果、相関係数は、 $r = 0.35$ ($p < 0.01$) であり、「道徳的強さ」因子の十分な基準関連妥当性が示された。

④ モデル適合度

確証的因子分析によるモデル適合度の検討を行った。その結果、適合度指標 CFI=0.99、RMSEA=0.04 であった。モデルの適合は、因子構造を確認するのに十分であると見なされた。

⑤ 信頼性の検討

因子分析結果による 11 項目の尺度全体の信頼性係数 (Cronbach's α) は、 $\alpha = 0.81$ であり、それぞれの因子の信頼性係数 (Cronbach's α) については「道徳的強さ」 $\alpha = 0.77$ 、「道徳的な気づき」 $\alpha = 0.78$ 、「道徳的責任感」 $\alpha = 0.84$ であり、十分な内部一貫性が示された。

(6) 結語

看護学生の道徳的感受性を測定するために十分な信頼性と妥当性を備えた 11 項目 3 因子からなる道徳的感受性尺度看護学生版 ver.3 が開発された。

4-2. 教材動画の作成

今回の一連の調査結果から、作成したビニエットの有効性が示唆されたため道徳的感受性を向上するための看護倫理教育に活用可能な実写映像化を行った。

ビニエット作成の手順として、①基本となる患者設定（看護学生が受け持つ患者であること、年齢、性別、疾患、症状、治療）を作成した。その際、低学年でも理解できるように複雑な疾患を避けた。②道徳的感受性を構成する 3 つの因子（道徳的強さ、道徳的な気づき、道徳的責任感）の各概念に基づいた 3 つのシナリオを作成した。場所と状況が具体的にイメージできるように患者、看護学生、看護師の立ち位置、表情、思い、発言内容とその際の口調をセリフを交えて作成した。③作成したシナリオを何度も研究者間で検討し、より 3 つの概念が明確に、かつ看護学生に伝わるように平易な言葉を用いて表現するように修正を繰り返した。④シナリオが完成した後、シナリオが示す場面のイメージが理解できるか数名の看護学生に確認した。その後、⑤イラストの得意な看護学生に依頼して、シナリオに沿ったイラストを合計 6 枚作成してもらった。⑥基本の患者設定、シナリオに沿ったイラストおよび適宜セリフを吹き出しコメントで付し、3 つの場面ごとに看護学生に意見を求めるインタビュー項目を含めたパワーポイントを作成してビニエットを完成させた。その後、そのパワーポイントを基に、実写動画を作成した。作成した動画の配信方法については、「看護倫理のひろば」URL：<https://ethicsworld.net/informations/detail/35/> に公開している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Miyoshi Takizawa, Katsumasa Ota and Jukai Maeda	4. 巻 83
2. 論文標題 Development of a questionnaire to measure the moral sensitivity of nursing students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nagoya Journal of Medical Science	6. 最初と最後の頁 477 - 493
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagjms.83.3.477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 滝沢美世志, 太田勝正	4. 巻 16
2. 論文標題 看護学生の道徳的感受性の変化 -1校の看護専門学校生の縦断調査より-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部大学生命健康科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田樹海, 小西恵美子, 八尋道子, 福宮智子	4. 巻 11
2. 論文標題 道徳的感受性質問紙日本語版2018（J-MSQ 2018）：下位概念「道徳的責任感」を見直して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 100-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 滝沢美世志, 太田勝正, 前田樹海
2. 発表標題 道徳的感受性尺度看護学生版第3版の開発 - 内容妥当性の検討 -
3. 学会等名 第15回日本看護倫理学会年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 M. Takizawa, K. Ota, J. Maeda, C. Sone, M. Natsume
2. 発表標題 Usability of moral issue vignettes in revising the Moral Sensitivity Scale - Student
3. 学会等名 International Council of Nurses (ICN) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 夏目美紀子 滝沢美世志 太田勝正
2. 発表標題 看護倫理の授業が学生の道徳的感受性に与える影響(その1) - 身体拘束に対する学生のとらえ方の変化
3. 学会等名 日本看護倫理学会第13回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滝沢美世志 太田勝正 夏目美紀子
2. 発表標題 看護倫理の授業が学生の道徳的感受性に与える影響(その2) 尺度でとらえた感受性の変化
3. 学会等名 日本看護倫理学会第13回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 夏目美紀子 滝沢美世志 太田勝正
2. 発表標題 看護倫理の授業改善のための課題 - 1校の看護大学のインタビューから
3. 学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滝沢美世志 太田勝正 前田樹海
2. 発表標題 道徳的感受性尺度看護学生版第3版の開発 中間報告
3. 学会等名 第17回日本看護倫理学会年次大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太田 勝正 (Ota Katsumasa) (60194156)	東都大学・沼津ヒューマンケア学部・教授 (32428)	
研究分担者	前田 樹海 (Maeda Jukai) (80291574)	東京有明医療大学・看護学部・教授 (32821)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------